**世阿弥研究会　18年6月26日(火)　振り返りと考察**

目次

一、河村博重先生のお話 2～3頁

1)、7月の第13回「面白能楽館」(おもしろのうがくかん)の案内

2)、「木村威夫花座　黄金花―秘すれば花、死すれば花―」

3)、鎌田先生の詩集『常世の時軸』について

4)、「能楽チャリティ公演～被災地復興、京都からの祈り」について

二、河村博重先生による観世榮夫先生のlecture 3～9頁

三、能舞台の見学と『天鼓』のお稽古 9～21頁

1) 『天鼓』の説明

2) 「謡い」に関して

3) 「頭」と謡いの解説に関して

4) 「替之型」に関して

5) 「能舞台」に関して

6) 「能舞台ミステリー・ツワー」に関して

①「見所」

②「奈落」

③「鏡の間」

④「床几」

⑤「幕口」

⑥「能面」

a.「翁」

b.「小面」

c.「般若」

⑦「鼓」

⑧「能面」

⑨「楽屋」

⑩「お蔵」

⑪「源義経の面」

⑫「刀」

⑬「勝修羅扇」・「負修羅扇」

⑭「着付」・「法被」・「長絹」

⑮「2階の楽屋」

⑯「大道具部屋」

⑰「能舞台の全体と橋掛かりの関係」

⑱「切妻」・「入母」

四、感想および考察と次回の予定 22頁

参考(参照)文献・資料一覧 23～27頁

**一、河村博重先生のお話**

**1)、7月の第13回「面白能楽館」(おもしろのうがくかん)の案内**



7月28日(土)に12時30分から「面白能楽館」(おもしろのうがくかん)があります。

体験型で、Ticketは2,000円です。

場所は観世会観です。能舞台の上で能装束を着けられるんです。

お囃子の体験ができたり、能面を掛けたりできたり。切り組みの体験をしたり謡の体験をしたり。

能装束を着けるというのも先着24名で着けられるという。

それでticketは私今、持っています。

「面白能楽館」は13回目になるのですけれども、13年前に京都の能楽師の人に企画公演をするから何かtitleを考えてくれということでみんなに配っていたのです。

その時に僕が「面白い能」というのを考えたんです。

それが採用されて「面白能楽館」になったのです。

それで能楽堂で色んなeventをするという企画公演をするということになったのです。

まぁ、こういうの層を広げていくためには大事な試みだと思いますね。はい。

特にあの小学生とか、中学生とか、若い人とか。若い子とかね。見に来て関心を持ってもらって。

でも毎年、すごく多いですよね。習うのを早くしておかないと。

私も何回か研究室の人と一緒に寄せてもらったりしていて。

**2)、「木村威夫花座　黄金花―秘すれば花、死すれば花―」**

これは昔に造形大学で映画に出演した時のチラシです。



**3)、鎌田先生の詩集『常世の時軸』について**

申し込んでくれていたら、詩集は届いていますか。

いいえ、まだ届いていないです。

じゃあですね、今日か明日には届くと思うので。

そうですか、はい。楽しみにしています。

できたんですよ。良かったですね。

さて、良かったかどうかはこれからの。

手に入れてきました。

まだでも読んでいないのですけれど、今。

生協にあった。ルネ。ジュンク堂にあって。ジュンク堂に入っている。

装丁はどうですか。装丁は素敵だと思いました。そう。

Netで見たよりも。そう。

Netで見たよりも装丁は良かったですか。

Netでも良いなと思って、この光っているのも。

まぁ、こういう作りは結構詩集には多いのです。

早く読みたいです。感想を聞かせて下さい。

**4)、「能楽チャリティ公演～被災地復興、京都からの祈り」について**

今日はちょっと宣伝で、「チャリティー能」というのをロームシアター京都でやります。

これも入場料が安いのですけれども、入場料自体が寄付されるのです。

震災の所に。それとか、入り口に義援金箱を置いてですね、それが、全部そっちに。

それで無論、能楽師は全部ただ働きでお弁当もない。ふーん。

それが全部そちらに行くという。

「チャリティ公演～被災地復興、京都からの祈り～」。へー。

この「京都からの祈り」というのは誰の提案ですか。

やっぱり、今の九郎右衛門先生とちがいますかね。

**二、河村博重先生による観世榮夫先生のlecture**



では始めましょうか。今日はあの、鎌田さんのご要望で「観世榮夫」先生のことを。

観世榮夫先生は観世の分家です。

観世流は、観阿弥・世阿弥から始まって、音阿弥まで行ってそこから流れて来て、観世の分家の初代が「織部」って言うんですけれども。

何時代の人ですか。 (織部清尚:後の十七世宗家で江戸時代後期の人物)

時代は分からないのですけれど、17世観世太夫(1731―82 )と書いてあります。

それでそれからずっと下って7世で観世雅雪。

それが幽雪先生の師匠に当たるのです。

だから幽雪先生は30の時にお父さんが『求塚』をされるということでそこにお供で付いて行ったのです。それまで1滴もお酒飲めなかったのですけれどもその時に行く時に飲んで、それから重圧の中で「京都観世会」とか色んな役職をして月に1回雅雪先生に習いに行っていた。雅雪先生が亡くなったら榮夫先生のお兄さんの寿夫先生に習いだしたのです。

榮夫先生は今やっている野村萬斎さんみたいなことを初めてされた方なんです。

異端児というか。

寿夫先生、榮夫先生ともう1人、弟の静夫先生がいたのですけれども、5・6歳の頃から「能ごっこ」というのをやっていたのです。「能ごっこ」。

たとえば洗濯物の籠に風呂敷を巻いて『道成寺』の練習、練習というか稽古をしていたのです。

そういう下地があったのです。

それで、29歳の時に、その当時には能舞台が少なかったので、色々な流儀が混じって稽古をしていたのです。喜多流とか宝生流とか。割りと馴染みがあったのです。

それで喜多流のmethodに魅かれて喜多流に芸養子になるのです、榮夫先生が。

それから「後藤榮夫」として喜多流に。

家元は喜多六平太という人なんですけれども、そのお兄さんの後藤得三という先生に芸養子となるのです。喜多流の能を始めて、それから色々と演劇の方に目覚めて、劇団を作ったりするのです。

劇団を作ったり、或いは、色んな映画に出たり。

『午後の遺言状』という映画があるのです。その監督は誰だったかな。新藤兼人。

それが映画の方で、T.V.ではたとえばT.V.のドラマに出たり、NescaféのC.M.「違いがわかる男」にも出たり。

後で先生に聞いたら「僕、coffee飲めないんだよ。」って言っていた。

それでですね、そういうことをしたので、能楽界からomitされたのです。

「除外」されたのです。「もう2度と能を舞ったらあかん。」と。

多(他)genreとやったのは「危険分子」だと。

それで寿夫先生とも物凄く表裏一体で仲が良くって、寿夫先生が白洲正子さんとか色んな劇をするのも、榮夫先生先生が重なっている訳ですね。

それと、戦後暇やったのでこの「世阿弥研究会」のような「世阿弥の本を読む会」というのを発足して寿夫先生、榮夫先生それから色んな学者とか、他流の能役者とかですね、或いは、岸田今日子とか色んな俳優と一緒に「世阿弥研究会」を開いて月に1回か2回か知らないけれどもやる。

それで色んなoperaの演出をしたり、自分自体が劇に出たり、或いは60年代の時には安保運動に参加したり、デモをしたりしていた訳です。

それで、寿夫先生が亡くなる時に、寿夫先生の遺言で、能楽界に復帰できたのです。

榮夫先生が復帰できるように全力を尽くされたのが寿夫先生。

榮夫先生はその時に復帰をしてまた色んなことをやっているんですけれども。

何年に復帰をしたのですか。

(←1978年に寿夫先生が亡くなり79年3月に榮夫先生が復帰される。

; 出典はWikipedia「観世栄夫」ほか))

53歳で亡くなられたのです、寿夫先生。(←1978年)

それで造形大学も教えておられて、造形大学は猿之助さんと一緒に「春秋座」という歌舞伎小屋みたいなところの設計にも携わって、一番上の「薪能」あそこの舞台を造った時にも色々とされて『翁』とかを舞ったり、あるいは学生に、初めて能を舞う学生に『藤戸』というかなり高度の能を教えて、或いは、普通やったら能のシテ方はシテしか教えたらあかんのですけれども、榮夫先生は治外法権やからワキとか狂言とか演出とか劇の「彦一ばなし」とか。

火曜日の13時から3講目、4講目があったのですけれど、信重がそこに行ってsupportをしていたのですけれども、兄の信重が46歳で亡くなったので、私、弟の博重がそれを継いでやったのです。

それでその次に水曜日の午前中は、三島由紀夫の劇の、昔は「卒都婆小町」。それでちょっと時代を下ると「綾の鼓」。それで火曜日の夕方からは、造形大学の能楽部を教えているのですね。

それで私は今、兄を引き継いで、能楽部に。

それで寿夫先生、榮夫先生の本は色々と出ているのですけれども、お薦めはこういうのです。

あー。

あるいは他の方が書いたこういうのですね。

ここに年表が書いてある。

お兄さんの寿夫先生が書いた本のお薦めはこれです。

今日はですね、榮夫先生の特集なので、実の榮夫先生の声を聞いて欲しいなと思って、脳のお医者さんの多田富雄先生の『望恨歌』の一部を聞いてもらいます。

これが、榮夫先生の実の声です。

「反核・平和のための能と狂言の夕べ」というのが平成10年11月14日に行われた時の。

出頭が大槻文藏先生。

これが榮夫先生の声です。

榮夫先生のsupportに兄の信重が行っていた縁もあって、榮夫先生が色々と海外公演に行かれた時に、Parisの時にも僕も寄せて頂きました。Parisで『内濠十二景』あるいは『二重の影』というPaul Louis Charles Claudelの作品を渡辺守章さんが演出となって。その時に野村萬斎さんと一緒だったんです。

それとPaul Louis Charles Claudelのお墓で『融』の舞囃子を舞いました。

それと日仏会館というところがParisにあるのですけれど、そこでもあの『薔薇の名―長寺谷の牡丹』という曲を。これもPaul Louis Charles Claudelの作品です。

これワキは宝生欣哉さんです。人間国宝の宝生閑先生の息子さんで宝生欣哉さんは今も後を継いでバリバリ。九郎衛門先生のワキの多くはこの宝生欣哉さんが。

それで造形大学でも「春秋座」等で榮夫先生が色々な公演に出ている時に僕も参加させてもらいました。春秋座であったPaul Louis Charles Claudelの『内濠十二景』の後の打ち上げの写真がこれなんです。

こんにちは。こんにちは。また遅くなりました。

今日はニューカマーを3人連れてきました。

はい、そうしたら後、見台をもう1つ。

これが荻原さん。榮夫先生のmanagerやった人ですね。

これが大倉源次郎さん。ああ、大倉源次郎さん。

これが荻原さんで、奥さんですね。

次はですね、観世榮夫先生のお兄さんの観世寿夫先生の『定家』という曲のテープです。

寿夫先生独特の美声というか。良い声ですよね。本当はもっと美声らしいのです。良い声だよね。

榮夫先生は色んなgenreに参加をしはったということです。本当に、八面六臂の活躍でした。

それで最後に、2007年の6月8日に交通事故で亡くならはったのです。

荻原さんが運転をしてはったのですけれど、榮夫先生は助手席かどこかに乗ってはったのですけれどもslipか何かで亡くなった。(←八王子市の中央高速道路の事故によって助手席に乗っていた荻原達子さんが2007年の5月2日に亡くなって、榮夫先生は仕事上の仲間を失った衝撃もあり、その約1か月後の2007年6月8日に患っていた大腸がんにより死去 ; 出典はWikipedia「観世栄夫」・「死去ネット」)

じゃあ、交通事故が無かったらもっと生きていた。そうですね。

それは残念でしたね。80歳。(←観世榮夫(栄夫)先生が亡くなったのは79歳 ; 出典は「死去ネット」)

80歳で27年前。　　　(←79歳で没後11年 ; 出典は「死去ネット」から「観世栄夫」「荻原達子」)

27年前って、石牟礼道子と同じ。(←石牟礼道子氏は2018年2月10日に90歳で亡くなる ; 出典は同様に)

その地謡は地頭がたぶん観世静夫先生、銕之丞先生。うーん。

この簡単にいうと、抜群に良い地謡なのです。

寿夫先生が地頭をしてはりますね。

観世寿夫先生がしはったことは、今まで能というのは古典として考えていたのですけれども、それをワキの謡か何とかの囃しとして能を劇として考えられた。そういう考え方というのは昔はなかったのです。

それで、また再び世阿弥の伝書の読解というのを再びさせたり、他の色んなgenreとのcollaborationを自分が中心となってしていかれた訳です。

日本で初めてのEurope公演を榮夫先生がされて、早くにそっちに行って能舞台を舟で運んだりその設営に携わられたりして、能をされた。それは何年ですか、いつ頃ですか。そこに書いてあったと思うのですけれど、いつまでは覚えていない。

戦前ですか、戦後ですか。それはもちろん戦後。

Paris公演。はい、Europe公演をParisで。

ここに書いている。

はじめて能がEuropeに紹介をされたのってその前にPaul Louis Charles Claudelとか日本にやってきた人たちが「能は凄いんだよね。」と噂は聞いていたでしょうね。

(←高田和文「能をめぐる文化交流―東と西、古典と前衛」も参照されたい。)

高田先生によると、「戦後ヨーロッパで最初に能が上演されたのは1954年のヴェネツィア・ビエンナーレの演劇祭であり、その後、観世流の能楽師が結成した銕仙会などを中心に世界の各地で能楽公演が行われるようになった」ことが述べられている。能楽師の観世寿夫先生、観世栄夫先生、野村万作先生などの「冥の会」に関する言及もある。)

それで寿夫先生・榮夫先生と一緒に中心となってやっておられたのが渡邊守明さん。

渡邊守明さんまだ元気ですか。

元気です。まだ造形で教授としておられます。本当に。

あと造形で、天野文雄さんも教えています。

造形で会った人ですけれども、寿夫先生とPaul Louis Charles Claudelの打ち上げの写真です。

野村萬斎さんとも2回ほどParisでお会いしました。

1957年ということは彼が30、30歳の時。だから60年以上前。うーん。

喜多流、後藤得三。友枝喜久夫。

友枝喜久夫というのは目が見えんようになって、能を舞えないようになった人。

友枝昭世さんの兄。お父さん。「能のドラマツルギ」を中心となってやった人。

あとこれを描いた「守護田・守護神の祭り」というのも出てはりました。

面白い話しが観世榮夫先生の奥さんが谷崎潤一郎の娘なんです。へー。

3回目の。観世榮夫先生の奥さん。

娘で3回目に結婚をした奥さんの連れ子なんです。

連れ子、そうですか。じゃあ、『細雪』の時の「いとさん」「こいさん」かな。

今日は「観世榮夫先生」の特集なんです、いつもは世阿弥の伝書を読んでいますけれども、今回は、鎌田先生のご要望で「榮夫先生」にspotを当ててということでやっています。

これの事なんですけれど、初回がお父様。

丹波篠山というところに能舞台があって、野外ですね。

ええ、春日の能楽堂で榮夫先生の『俊寛』を観たのです。

そこに能楽資料館というのがあって、能面が多いところです。

それを掛けたこともあったのです。中西さん。

そう中西さん、あのうちの叔父さん、隆史おじさんが物凄く仲が良かったのです。

ちなみに寿夫先生が若い頃に、全国の若手能楽師を集めた、なんというかな、Rankingを決める会みたいなのがあったのです。2回程あったのですけれども、1回目は観世寿夫先生が優勝をしているのです。1位を取っているのです。2位、3位は他の流儀の人。

2回目は、なんとうちの父が1位を取ったのです。

凄い声ですよね。

本当は綺麗な声なんですけれど、わざとこうしているのです。歌手のBob Dylanのように。

なぜ観世寿夫さんだけそういう先鋭的な活動が出来たんですか。

１つは若い頃にお父さんから言われて「能の跡を継ぐのは寿夫や。」と言われて、「後の息子は何をやっても良いよ。」と言われて、それで色んなことをしだして、pianoを習ってみたり何かをしていた。

それは周りからやっぱり異端視されていて。

そうでしょうね。

だから能界から追放されたんです、31歳の時に。

能界から、能をしちゃいけない、と。変なことばっかりやっていたから。

それでね、20年くらいして50歳代の時に戻って来たんです。お兄さんが死んで。

逆にいうと、お兄様が亡くなられなければそのまま。

お兄様が復帰をするのに、尽力をしたのですね。

それでお兄さんが生きていても復帰したかもしれませんが、寿夫さん、長男は亡くなってしまったので、まぁ、榮夫さんの後で静夫さん、静夫さんが「銕之丞」を継いで。

宗家ですか。

宗家じゃない、宗家は観世清和さん、これが家元なんです。ああ。

家元の次の位が、銕之丞家なんです。「銕仙会」。

3つ目に継ぐのが、片山九郎右衛門家ですね。そうですね。

これは京都に来ていたから、天皇が能を観る時には片山家が能を舞っていたと。

それで関西のことなどを指揮していたという。

梅若家というのは、家元のツレの家なんです。

それで河村博重さんはその片山九郎右衛門さんの内弟子。

本当は、僕は「林家」だったのだけれども、寿夫先生や榮夫先生に憧れていたから京都でその流れを汲んでいるのは「片山幽雪・九郎右衛門先生」だからその先生のところに行ったのです。若気の至りで。

いやいやいやいや。まぁ、じゃあこうやって鎌田先生と能舞をされるbackboneはちゃんとあった訳ですよね。

まぁでも幽雪さんはね伝統、本当に基本的な、「正当派」なんです。

けれども、その「世阿弥研究会」みたいなのと一緒にやってはったから、『鷹姫』とか最近では『松山天狗』とか色んな新作能をやってはったのはやってはったのです。うーん。

それで旧作も大事にしてはったのです。

幽雪先生は子どもの頃、身体が物凄く弱かったのです。

だから身体をいつも僕らがしているように朝風呂に入って乾布摩擦をしてはるのです、毎日。

30歳の時に神戸でお父さんの片山博通先生が『求塚』を舞って。

それも寿夫先生が復曲をした曲なのです。

その中入りの頃に、倒れて死んでしまったのです。舞台の上で。

舞台の上で。あら。

それで博太郎先生はその時運転手として来ていたのです。

それで楽屋に来ていたのです。はい。

それで舞台から降ろして、その後の地謡が続きを謡えなかったのです。ああ。

Dramaticですね。それでそこでその公演は終わってしまった。

普通は後見が変わりを舞うのだけれども、その時は。

その時に片山家は『求塚』を廃曲というかやらないようにしようかという話しもあったのだけれども、幽雪先生が「そんなことをしたら能としてはあかんので。」ということで舞われるようになったということで。うーん、そうですか、ちょっとdramaがありましたね。

あと能舞台の上で亡くなられたのは、京都観世会で大阪の大槻文蔵先生、人間国宝の先生のお父さん(大槻秀夫先生)が。舞台の上で亡くなった。心臓発作か何かで亡くなった。

新聞を見ていないので、本でしか。

あと、人間国宝の大皮の亀井忠雄っていう人のお父さん(亀井俊雄先生)も舞台の上で亡くなったっていうことでした。意外に亡くなられているんですね。舞台の上っていうのは最高でしょう。

昨年の「薪能」で『杜若』を舞っていた帆足正規先生が亡くなられたと九郎右衛門先生が言っていた。

血管が切れたのかね。緊張をしていますから、舞台の上。

**三、能舞台の見学と『天鼓』のお稽古**

**1) 『天鼓』の説明**

舞台見学と今から学生とOBの稽古を見てもらいます。

その曲は『天鼓』という曲です。うん、『天鼓』。

中国のお話しで、天からMaria様ではないけれど、天から鼓が降ってきた夢を見て生まれた子どもを「天鼓」と名付けた訳です。すると本当に天から鼓が降ってきたのです。

その子は、分身のようにその鼓を大切に扱って、すごく良い音がするというのを中国の帝が聞きつけて自分が欲しいということで、それを奪い取ろうとするのですけれども、天鼓は鼓を持って逃げたのです。

それで帝に鼓を取られて、反逆したというので殺されてしまうのです、湖に。

それから帝がしめしめと思って打っても、音が鳴らないのです。

鳴らないからお爺さんが呼ばれる訳です。お父さんが。

お父さん(王伯)に打ってくれと。

お父さん(王伯)は息子が反逆をしたから自分も殺されるのではないかと思って辞退するのですけれども、「とにかく打ってみろ。」と。

それで打ったら、物凄く良い音がする訳です。

それで帝が「あぁ、私が悪いことをした。」と後悔をしてその一家に数々の宝をあげて、そして、天鼓が亡くなった呂水というところで鼓を添えて音楽法要(管弦講)を行った。

そうすると天鼓の亡霊が在りし日の姿でやってきて鼓を打ちながら喜んで帰るという。

その後半の喜んで帰るというところなんです。

それで、これは世阿弥の息子の観世十郎元雅の作と言われていて、元雅の作の特徴の1つは、前場が権力者によって迫害をされるというか、そういうのが特徴の1つです。

私は「受難能」と名付けている。うーん。

『隅田川』もそうです。『弱法師』もそうですね。

子どもと別れて、最終的には子どもは死んでいたとか。

見てもらうのは「朗らか」なところです。

今日は特別に御開帳日です。じゃあ、ちょっと。

仕舞では出てきませんけれど、ここに鼓があるというような。

**2) 「謡い」に関して**

「おもしろや時もげに。おもしろや時もげに。秋風楽なれや松の声。柳葉を払つて月も涼しく星も相逢ふ空なれや。烏鵲の橋の下に。紅葉を敷き。二星の。館の前に風。冷かに夜も更けて。夜半楽にも早なりぬ。人間の水は南。星は北にたんだくの。天の海面雲の波立ち添ふや。呂水の堤の月に嘯き水に戯れ波を穿ち。袖を返すや。夜遊の舞楽も時去りて。五更の一点鐘も鳴り。鳥は八声のほのほのと。夜も明け白む。時の鼓。数は六つの巷の声に。又打ち寄りて現か夢か。又うち寄りて現か夢幻とこそなりにけれ。」

**3) 「頭」と謡いの解説に関して**

ではちょっと説明をしながら。

この少年は、黒いたくさんの毛を付けた「頭」(かしら)というのを着けています。

黒い頭というのは「亡霊」のことを意味しているんです。

赤い頭で髪の毛が多いのは鬼畜とか鬼とかで、白い頭はそれが歳を取ってからでだいぶ神に近くなる。

それで「おもしろや時もげに」ここのthemeが時なんですね。

「秋風楽なれや松の声。」「秋風楽」というのは雅楽の一種なんですね。

見えないけれども、お月様が見える訳。

「柳葉を払つて月も涼しく星も相逢ふ空なれや。」というのは「織姫」と「彦星」のことで天の川で会うというやつ。

烏鵲の橋の下に。紅葉を敷き。二星の。館の前に風。

能には普通の型と「替之型」というちょっと上等な型がある。

能の時で仕舞の時にはしないけれども、能の時の「替之型」は、ここでこう首を振るんです。

「冷かに夜も更けて。夜半楽にも早なりぬ。」

ここからツヨ吟からヨワ吟になって華やかになるから、今まで仮に足幅を1ｃｍであったとしたら5ｃｍにしたら同じ速度でも速い。

「人間の水は南。星は北に」

湖の呂水という水と空にある天の川とを対比させている訳です。

昔、鎌田さんの『モノ学』の本で、地球が書いてあって両方上と下、ああいう風な話しになる。

「天の海面雲の波立ち添ふや。呂水の堤の月に嘯き水に戯れ波を穿ち。」

波を穿っているわけ。これを「替之型」で言うと、「替之型」では先にこうしろとか、あるいは、

「袖を返すや。夜遊の舞楽も時去りて。五更の一点鐘も鳴り。鳥は八声のほのほのと。夜も明け白む。時の鼓。数は六つの巷の声に。又打ち寄りて現か夢か。又うち寄りて現か夢幻とこそなりにけれ。」

それで能に出て来る亡霊は、吸血鬼と一緒で夜になったら元気になって朝になったら帰らないといけないのです。

だから、空が明け方になって6時になったら空が明るい。

それを「替之型」でやったら2つあって、1つはこうして手を6つ数える。

「時の鼓。数は六つの巷の声に。」というやり方もある。

「現か夢か。」というのは「夢うつつ」というのと「鼓を打つ」というのが掛かっている。

「又うち寄りて現か夢幻とこそなりにけれ。」

これがまた次に湖に「ごぼごぼ」と沈んで、あの世に戻っていくという。

**4) 「替之型」に関して**

ここで「替之型」についてちょっと説明しますけれども、「替之型」というのは、世阿弥の言う「面白き」「珍しき」でもあるのです。

滅多にしないから。

でも今日みたいに6つの「替之型」があったら、6つ共に全部をしない。

3つくらいして後を残しておく。

そうしたらもっともっと奥があるのではないかと思われるということです。

**5) 「能舞台」に関して**



それで、この能舞台について説明します。

能舞台は、家の中に屋根があります。

これは野外にあった時の名残なのです。

明治くらいから「能楽堂」という名前に変わって、「猿楽(申楽)」も「能楽」という名前に変わって、室内でやるようになったのです。

江戸時代に何か、外であるような感じなのですけれども殿様は中にいて舞台とそれを観ている人との間には空があるのです。特徴は、後ろに松が描いてあります。

これは「老松」といって元は奈良にありますけれど、神社や仏閣で宗教行事として五穀豊穣と平和を願ってしていた。それで「老松」とかは北島三郎の「まつり」の歌や祭りでも同じように、岩とか松とか木に神が宿るということがあるのです。

神に見立てた「松」が前にあったらお客さんが見えないから後ろにある。

それでこの「松」も非常に縁起の良い「七・五・三」の羽振りで、backを松にした理由は、これを桜にしたら春の曲には良いけれども冬の曲には合わない。

「松」は年中枯れないのでどの時期の作品でもいけるということで。

もう1つここにあるのは竹ですが、竹は節が1つ2つ3つとあるのは、代々続いて行っていつまでも能が続いていくという意味がある。

そして「松」「竹」ときたら後、お酒の好きなお父さんなら何かない。

「梅」。「梅」探して。

「梅」はね、ないのです。なんでないのかと言ったらですね、今日、私が『天鼓』の芝居が上手く決まったら「芸の花」が咲いて3つ揃うという。

あと能楽から生まれた言葉は、1回生出て来て、「摺り足」をして。

能から出て来た言葉は「檜舞台」なんです。この板は「檜舞台」なんです。

「檜」と決まっている。

それで、舞台には方位と方角とがあって、こちらのワキ頭に当たるのが東、こっちが角柱が南、こっちの橋掛かりにあるシテ柱が西。それでこっちが北。

だから「春・夏・秋・冬」でも良いし、後、「色」でもあるのですね。

「青龍」とか「玄武」とか。

この東が現世で西に当たるところは「あの世」とか「天上界」。

その「あの世」から亡霊が出て来るというか、笛の「ピィー」という開けた空間からやってきてここで色々と物語を語ってまた日常に戻って来るという。それでワキの方は結構お坊さんが多いのです。

前場でシテ方が「実は私です。」と言って弔っていると夕方から夜にかけて在りし日の姿で現れてくる。そのお坊さんというのは面を着けないのですけれども、そのお坊さんがcounselingみたいなことをす

る。シテの悩みを聞いてあげる。

シテというのは主役ですけれども、シテが全快して治る時もあれば或いは、また暫くは調子が良くなって良いけれども、全快しないでまた調子が悪くなるというpatternもあるのです。

1回生上がって、それで摺り足して。

それで能から来た、これも拍子なんですけれども、普通の拍子だったら「トンツー・トンツー・トントン・トトン・トコトン・トントン・トトン」という拍子になるんですね。

この「トコトン」というところはなかなか踏みにくいのです。

だから「とことん勉強した」というのがこの「トコトン」なんです。

すぐ出来るものではない。

それとこの板の下には大きな「あるもの」が隠されているんですけれど、それは何でしょう。

音を良くするために、大きな壺がある。うちは格段に大きな壺が舞台のこことここにあります。

それで後、殆ど真っ直ぐに見えるんですけれども、こういう角度になっている。

こっちの方が低い。

こっちの方が低くなっているのですけれども、舞台には「序破急」というものがあって、摺り足して。

それで初め「ちょろちょろ」、中「ぱっぱ」と最初にする、それからちょっと「破」になって、終わる時には「急」というのを。

それでまた右に回るとしてもゆっくり回って、すごくゆっくりと回って、また正面を向く時には早い。

それが「序波急」。

それが上手く出来るように板の角度を変えているのです。

太鼓の撥を置いたら「コロコロコロコロ」と回転するくらいに角度を付けています。

もう1回摺り足をして。

この摺り足から来た言葉が、上手な人はこういけるけれど、下手な人はこういう風になる。

それが「板に付く」ということなんです。「板に付く」。

あと、この松をよく見るとこっちの松が一番高くて、こっちは中くらい、となっている。

だから役者が出て来た時には、かなり遠くから出て来たようになり、摺り足でこっちに来た時には、一の松に来た時には役者がワキから近くに来たということになるのです。

それで『翁』一曲だけは橋掛かりの中心を通れるのだけれども、他の曲は全部右肩を通す。

あとですね、うちの舞台は石が黒いのですけれども、観世会館などでは「白砂」なんです。

「白砂」というのは「水」のことなんです。

水の上に能舞台があって、歩いてくるのです。

この階段を今上ったのですけれども「階」(キザハシ)というのですけれども、江戸時代に能が式学となって、国家公務員と能はなったのですけれども、出来が良かったら殿様から刀とか何とかを拝領したりする時に倣ってこういう。今は、能面というのは前に言いましたように物凄く視野が狭いので、たまに落ちる人がいる。落ちたら階(キザハシ)から戻って来たりする。

落ちた時には落ちた人が先輩に向かって言うのですけれども、その前に楽屋で見ていた能楽師が「面は大丈夫か。」と言う訳です。「足は大丈夫か。」ではなくって。

足は1ヵ月か2ヵ月入院をしたら治りますけれども、面の場合には直してもそれ以上作品が上がることはない。落ちても上がることはない。それで大事に、大事に扱うのです。

能面を物として扱うのではなくて、先代や先々代が着けていた魂を自分に合わせるのです。

だから能のこの世界で「お面(めん)をかぶって能を踊る。」と言ったら5、6発殴られるのです。

「お面(めん)」ではなくて「面(おもて)」なんですね。

「表裏」の「おもて」でもあるし、「掛ける」というのは「術をかける」とか「魔法をかける」とかそういう意味なんです。あと踊るというのは上下運動が多いのですけれども、能は水平運動が多いのです。

**6) 「能舞台ミステリー・ツワー」に関して**

これから「能舞台ミステリー・ツワー」を始めます。

①**「見所」**

ここは「見所」という観るところなんですけれども、皆さん揃って来てください。

②**「奈落」**

これがね「奈落」というところです。奈落。

色んなものを置いてありますね。

前に進んでください。

通り抜けて。「奈落」を。

③**「鏡の間」**

「鏡の間」かな、これが。

ここが「鏡の間」で、自分がここで能面を頂いてから他の役者に変身をする訳です。

だからもう能舞台にはしょっちゅう鏡がありますね。

④**「床几」**

それで、お囃子の人が座る「床几」がこれなんです。

Self-serviceなんです。

これを持って出て行ってこう座って、timingでこうして、こうして座るんです。

ちゃんとcushionがある。

出る時には持って行って、持って帰る。

あの、鏡の間って多くはこっちの方にないですか。

あのね、観世会館はこっちで、河村舞台はやっぱり建物の広さの事があってそっちになっている。

それで囃し方はどこで笛を吹くんですか。

え、ここら4人並んで。4人並んで。へー。

「tuning」と言おうか、それをする訳です。

**⑤「幕口」**

今はね、せっかくだから体験courseを体験して頂こうと思います。

幕を上げてもらいます。2人1組で。

これはね、正座をしてください。

普通の劇だったらですね、staffが上げるんですけれども、シテが「幕」と言ったら、上げるんです。

それで、出て行ったら下げる。

これ見えるね。

はい、だから、こうしたりこうしたりしているのです。

ちょっと見えちゃうかな。

じゃあ、私がいきますね。「お幕」。

開いたら、こういう風にして。

はい、じゃあ次の2人。

それでこれは基本的に後見がします。

衣装を着けたりするのも後見です。

それで荒い曲は「幕」と言ったら「パッ」と開ける。

「お幕」。

それでこれが頭に掛からないように工夫をしないといけない訳。

もっと高く上げるとか、これをこういう風に広げるとか、そうしたら高さが変わる。

はい、じゃあ、交代してください。次の2人。

観世会観とかはこっちがもっと広いのですけれども、うちは敷地の具合で。

「お幕」。

こういう重要な時に向こうからこっちへ通り抜けようとしたら「奈落」を通り抜ける。

もうちょっとこう開かないと。

こうしたらあかんので、もう少し横にするか、もうちょっと奥にするか。

はいじゃあ、次の二人。

「お幕」。

正座、正座をして。はい。

これやったら、だいぶ低い。

うん、これはこれがつく、頭に。

2つ方法がある。1つはね、ここをこうして、これをこうしないといけない。

ああ、はいはい。

こうする訳。そうしたら高くなる。

はい、交代。はい、次の二人。

「お幕」。

これじゃ低いので、もう少し上げないといけない。

はい、じゃあ交代。

それでこの幕の5つの色は「木・火・土・金・水」というて、出る色が3種類で引く色が2種類。

「お幕」。

これもやはり2人の息が合ってないと、なかなか上手く行かない。

はい。後まだやっていない人。

「お幕」。

それでその年に1回、お正月の前に、うちの家では、お豆腐の雪花菜(オカラ)で拭きます。

観世会観では糠で。糠を炙ったやつで拭きます。

それでお酒で拭く人もいるんですけれど、お酒で拭くと直ぐ板が黒くなるという説があります。

へー。

鏡の間。鏡が無かったら不安でしょうね、昔は。

今は鏡ですけれどね。まぁ、銅。銅かな。

⑥**「切戸口」**

それからここが、地謡が舞台に上がる時の「切戸口」なんです。

昭和31年に出来上がりましたということが書いてあるのです。

この白い線は、良く頭を打つ人がいるのです。

頭を打たないように。へー。

⑦**「鼓」**

これが鼓というものなんです。

これは、ある哺乳類のお腹の皮なんです。

さて何でしょう。うーん。

哺乳類。

イルカ。イルカではない。

犬でもない。狸ではない。

馬。そうピンポン。

馬と。

牛。牛ではない。

ヤギ。ヤギではない。

奈良といえば。「鹿」。

それで馬と鹿は昔から添えが良かったのです。

賢い人やったら分かる。

それで、これの名前はなんでしょう。

この楽器の名前。

「鼓」。

もっと正確に言うと。

「小鼓」。

「小包」は郵便屋さんが持って来るもので、「小鼓」。

世界の中で下から上に打ち上げる楽器は珍しい。

へー。

Papua New Guineaのなんとかの楽器。

下から上に打ち上げるのは珍しいのです。

それで、音を変えることができるのです。

このここはね「調緒」というのですけれども、キュッと握ると高い音が出る。

「ポンポンポン、ポンポンポン」。

「ポンポンポンポン」「ポンポンポンポン」。

それで、このrhythmの流れは8拍なんですね。

それでは私が手を叩きますから、皆さん一緒に手を叩いて下さいね。

「ぱん」。

今、上手いこと出来たのでびっくりした。「パチパチパチパチパチ」。

「よぉー」って言ったら合うんですけれど。

だから、能にはorchestraのように指揮者がいないから一列で並んではるから、掛け声によってtimingを図るわけ。

あと、こういうあれもあります。

「ポンポンポンポン」「よぉっ」「ポンポンポンポン」「よぉっ」「ほぉっほぉっ」「ポンポンポンポン」「よぉっ」「ほぉっほぉっ」「ポンポンポンポン」「よぉっ」「ほぉっほぉっ」「ポンポンポンポン」。

これを15分くらい。

これは650年、世阿弥の頃のreggaeなんです。

「すんちゃか、すんちゃか。すんちゃか、すんちゃか。」といって何か神懸って来るとか。

それが650年前のreggaeっていうのは、神楽でこれを15分やる。

また直りというのもあって、そこから、「ぽんぽん、ぽんぽん」とこうやって直って来る。

神楽で最後まで打ち続けているのを「神楽止め」、神楽で終わるというやつもあります。

それでこの楽器はあるお花に似ているのです。

タンポポの花を「鼓草」というのです。

なぜかというと、「たん」(ポン)「ぽぽ」(ポンポン)となって、これで「鼓草」ということ。

⑧**「能面」**

せっかくあるので、「能面」を。

a.**「翁」**

まず「翁」を。

これはね観世の流儀、宗家のものの写しです。

「翁」。これはね、お爺さんなんです。

「千と千尋の神隠し」でどろどろの神様が着けていたものを思い出します。

五穀豊穣を司る神様です。

それに比べて狂言が着ける「黒式尉」というのは、お米というか外に出ているから色が黒い。

これは色が白い。切顎になっている。

これは檜で出来ています。柔和な顔で。

自分も平和、人も平和。

けれども「翁」でやるのは神と鬼なんです。

だから天気が良い時には神で天気が悪い場合には鬼になるとか、そういう表・裏みたいですね。

能役者はこの面をもの凄く大切に扱って、地方での『薪能』とかは装束は宅急便で送るけれども必ず面は役者が持って行くという感じになる。

b.**「小面」**

次は「小面」。

これは15、16歳の女性なんです。

それで「天地の目」というのがあって上を向いている目と下を向いている目が、こうしている時には空を見ているように見えるし、こうしている時には泣いているように見えるし。

それで半分は非対称です。

どっちかって言うとこっちの方がきりっとしている、出て来る時。

それで物語が終わってこっちの半分が柔和な顔です。へー。

それでお歯黒をしています。

その当時の美人は髪の毛が長い。

それで15・16歳でも今と違って結婚をしていたり。

それで髪の毛を剃って上に着けている訳。

その当時の化粧品は水銀が多かったらしいので短命の人が多かったのです。

それで出家をして尼さんになるとお化粧をしないから長生きをしたのです。

それで余談ですけれども、バカ殿様とかでやっている隣の城と隣の城のお殿様にたとえば結婚して子どもができたら隣の城の従者が見舞いに来るのです。

その時に、その殿様の経済力とか健康とかを探りに来るのです。

何かどきっとした時に、眉毛が動くのです。

だから動かんと分からない。

それと直接に喋ったりしないのです。

側妻という人に「ぼそぼそぼそぼそ」と。

だから声の具合で健康状態が分かったというようなことがある。

せっかくですからこれを。

一番見えにくい面です。いかに視野が狭いかということを。

これがいかに見えにくいかということを体験してもらう。

それでこの面を掛けて装束を着けて能舞台で摺り足をするわけ。

物凄く見えにくいです。ちょっともう一回。これは耳だけ持って。

掛けてくれる人によって雰囲気が違うというのもあります。

同じ作品でも、掛けてくれる人の状況とか服装とか態度とかによって違ってくる。

顕微鏡みたいだね。

裏はこういう風になっていて「つるん」としていないのです。

1時間から1時間30分くらいすると汗をかくので、汗が横から流れ落ちるようにしている。

だから能面を外す時にこうしたらあかんのです。

口の所から汗が出る。

必ずこういう風にして、今だったら、ティッシュで拭かないとあかん。

そして、またこれを着ける時には下から。

c **「般若」**

最後は一番ご存知の「般若」という面です。

鬼と思う人、男と思う人、女と思う人。

これは女なんです。

女の嫉妬の極みなんです。彼氏を取られたとか。

これは2つの表情からなっていて、鼻から上は泣いていて、鼻から下は怒っている。

泣きながら怒っているのです。だから「bassが来ない」から怒っているのとは違うのです。

女の人はそういう角が通ってはるみたいです。

男の人は彼女をこんな顔にさせないように、彼女はこんな顔にならないように。

だから結婚した時の白い綿帽子を「角隠し」というのです。

この面の方が先程の能面よりも見えやすい。

こころが乱れているから、髪の毛が乱れているのです。

それで持って良いところはね、耳だけなんです。

こうすると手の油で塗りが悪くなる。

これは先程の面に比べて視野が広いのです。

そうですね、割と。

「般若」というのはSanskrit語で「悟っている」という意味なんですけれども、悟る一歩前なんです。悟る一歩手前でこんな表情なんですか。

そうです、悟る一歩手前。

それで目からも鼻からも、結構、鼻からも見えたりするんです。

鼻からも見える、下が。はい。

今度、造形大学のworkshopでもこういう面を色々持って行って、説明をしたり、摺り足をしたり、鼓を打ったり。

⑨**「楽屋」**

はいでは次にこっちの部屋へどうぞ。

これはね、楽屋です。

今日は、特別に普段見せないところを。

能舞台の「心臓部」です。

これ火事が起きても大丈夫なように土嚢を置いてある。

⑩**「お蔵」**

ここは「お蔵」という。

正面に能面があって、左右に能装束が掛けてあります。

二階のところにも能装束があります。

ここは女性は入ってはいけない。

男子だけということになっています。

⑪**「源義経の面」**

次はここです。

これは今、源義経が着ける面があるんですけれども、能装束では**「**黒垂**」**という髪の毛と。

侍みたいに。

平家と源氏と言われて、これは源氏なんですけれど、平家の方は清盛の流れなんですけれど、平家の方が家に籠って政治に参加して琵琶とか笛とかを吹いているので色が白いのです。

こっちは馬に乗って戦いに行っているから日に焼けて色が黒い。

そして皆で言ったらbikeとか自転車で来ているから毛が棚引いているわけ。

イージー・ライダーだね。

⑫**「刀」**

それでこの刀は「竹光」です。金箔が塗ってある。

たとえば海外公演で一番小さいのは刀なんです。

⑬**「勝修羅扇」****・「負修羅扇」**

これが「勝修羅扇」です。

朝日ですね、松に朝日。

負修羅の場合には波に入日なんですね。

勝った方が調子が良い。負けた方が調子が悪い。

⑭**「着付」・「法被」****・「長絹」**

これが着付です。

『屋島』の時に着ける着付です。

それで輪宝と鳥みたいなもの。

これが波ですね。

全部色が変わっている。

上から着ける「法被」という。

特徴は、袖が2倍になっている。

冬だからこれを着るのかというと曲によって決まっています。

『羽衣』やったら「長絹」という薄手の衣装を着ます。

これが「長絹」です。

はいじゃあ、来て。名前、なんやったかな。

門前です。

門前さんはね、これ『羽衣』という曲で着けます。

舞台を摺り足で入っていって、摺り足をしているんですけれども意味としては空を飛んでいるんです。

だから昔で言うたら猿之助さんとか、今で言うたらジャニーズの堂本光一さんとかがやっているのもそう。舞台でやってはる。

そしてたとえば富士山を上に見たら自分が低い位置になる。

最後に舞い上がっている時に富士山を下に見たら上に上がっているということになるのです。

だから、これは能の『羽衣』。天使だから、門前さんは今日は「エンジェル門前さん」です。

えー、上から目線だね。上空から。

それで能楽講座の時にもこの「長絹」を3枚くらい持って行って、或いは、白地の「長絹」であったり或いは白で鳥の羽みたいなのが金で書いてある、それは鎌田さんの「宇宙」という時に着た。

その曲によって衣装を変えるということなんです。

⑮**「2階の楽屋」**

はいではね、次は2階。ここはよく「世阿弥研究会」で使う場所なのです。

物凄く部屋が多いのですね。

ここはお囃子とか狂言とかワキ方の控室になるんです。

それでamateurの人の発表会では女の人の楽屋になる。

それで特徴は鏡が多いのです。

鏡で衣装や紋付を写すと。

あー、楽屋だったんですね。楽屋です。

これは大鼓を乾燥させて炙るのです。焼き鳥ではないけれども。

それで大鼓は世界で一番手が痛い楽器なのです。

机を叩いているみたいに痛いのです。

だから大鼓の先生はここに「指付ケ」というものを付けていたりしているのです。

手が少しでもましなようにです。

⑯**「大道具部屋」**

これが大道具部屋です。

だから屋根があったり足袋があったりするのです。

足袋とかが多いのは、今、うちでは年間300回以上修学旅行のworkshopをしているので、学生さんの足のsizeを聞いて全部これを用意している訳です。

何月何日にどれだけの数が必要というように。

それで学生さんに配る資料。先生方に配る資料。

この竹を組み合わせて色んな大道具を作るんですけれども、それも能役者がするんです。

若い子が。だから大道具係というのがないのです。

観世会観みたいなところは地元というか叔父さんとかがいてくれますけれども、河村舞台みたいに個人的な舞台は全部自分たちで作っているという。

商業。はい。手作り

たとえば、手作業の1つとして、これ組み合わせるんですけれども、これならば、桜がある。これをここを折って一つ一つ作っていく、そして終わったらまた片付けるというような感じをやる訳です。

これは車輪に当たる訳です車。それを上手く。

これ上もそうです。色んなものを組み立てて終わったらまた片付ける。

この上は舟なんです。

⑰**「能舞台の全体と橋掛かりの関係」**

はいじゃあこちら。それでね、段差があるから気を付けて下さい。

京都の家屋は客席のcapacityが広げられるのです。

人数が多かったら襖をとって広げられる。

それでこの河村能舞台は日本で一番古い西本願寺の写しなんです。ふーん。

西本願寺は国宝の北舞台が織田信長の作った舞台で、国宝になっている南舞台は豊臣秀吉の作った舞台なのです。

橋掛かりはちょっと短くないですか。

だからその、土地の具合。

観世会館は土地があるから大丈夫です。

だから舞台によって長さが違う。

昔は橋掛かりがもうちょっと後ろからあった。

橋掛かりが2つある舞台もある。

⑱**「切妻」・「入母」**

これは「切妻」というものなんです。

これは「切妻」とあと「入母」といって能舞台の前に掛かっているやつもあります。

秀吉の名残が「桐」の紋。

それでですね、うちの舞台では色んな、うちの父がですね、芸はしっかりしているけれども色んなことにアバウトな方でGorbachevさんが来たこともあります。

あとカールスモーキー石井(石井竜也)さんとかですね、加賀まりこさんとかも来ていました。

あと、歌舞伎役者の團十郎さんとかも来ているし、美空ひばりさんも来ています。

はいじゃあ、そっち階段から下りてください。

うちの舞台は築60数年くらいです。

32年やから60年弱。

あの板はお客さんの量によって出し入れして少ない時には引いてあって多い時には出してあるということです。この左側がお手洗いになっています。

はい、ではですね一応舞台の説明はこれで終わりたいと思います。

では次回の「世阿弥研究会」の日を。有難うございました。

**四、感想および考察と次回の予定**

① 6月の世阿弥研究会では、前半に河村博重先生による今後の能舞台のご案内と観世榮夫先生と当時の能楽界の様子に関するlectureが行われた。

② 具体的には観世流における能楽の伝承の歴史は室町時代に能楽を大成した観阿弥と世阿弥の親子と音阿弥から始まり、江戸時代の17世観世太夫(1731―82 )に至り、片山幽雪先生の師匠との関係で、それからずっと下った7世の観世雅雪先生や観世寿夫先生・観世榮夫先生・観世静夫先生(現在の観世銕之丞先生)と河村博重先生との関係にまつわる師弟関係に関してのお話しについて伺うことができた。

③ 観世榮夫先生がFranceのParisに海外公演に行かれた際のエピソードや渡辺守明先生がPaul Louis Charles Claudelの作品を演出された『内濠十二景』に関してやPaul Louis Charles Claudelのお墓の前で舞われた『融』の舞囃子に関するエピソードも伺うことができた。

④ また観世榮夫先生が喜多流に行っていた時に師事していた師匠である後藤得三先生や喜多流の友枝喜久夫先生の能に関する話題も展開されていた。なお友枝喜久夫先生は友枝昭夫先生のお父様にあたる方であることや観世寿夫先生の若い頃には全国の若手能楽師を集めたRankingを決める会が行われるなどされていて、その第2回目の時に1位を取られたのが河村禎二先生であることも伺わせて頂いた。

⑤ 後半の能舞台の見学では京都造形芸術大学の能楽部のOBの方や学生の皆さんのお稽古の様子を見させて頂きながら『天鼓』の物語と「仮髪」の一種である「頭」について伺い、「替之型」に関しても理解を深めることができた。

⑥ それに引き続いて行われた河村能舞台の舞台見学では普段あまり見ることができない能舞台のあちこちを実際に巡りながらその仕組みや成り立ちについての理解をさらに深めさせて頂くことができたように思われる。

⑦ 全体を通しては、当時の観世榮夫先生や河村信重先生も河村博重先生のように能楽の面白さについて語り教えられていたのかなとも感じられる大変貴重な研究会の1日であったように思われる。

⑧ 次回の世阿弥研究会は7月24日(火)の18時より河村能舞台の楽屋で行われる予定である。

なお次回は通常の『世阿弥能楽論集』「花鏡」の講読の方に戻って、続きの214頁6行目からの「幽玄之入レ境事」(幽玄の境に入ること)の講読から行われる予定である。

**参考文献・資料一覧**

① 小林責, 西哲生, 羽田昶著『能楽大事典』筑摩書房, 2012.

「梅若座」、「大槻文蔵」「片山九郎右衛門」、「亀井忠雄」、「亀井俊雄」、「河村禎二」、「観世清和」、

「観世寿夫」、「観世栄夫」、「観阿弥」、「世阿弥」、「音阿弥」、「観世流」、

[九]能楽諸家系図シテ方「十七世 織部清尚」pp.1050～1052.

pp.85～86、p.126、p.192、p.208、p.208、p.215、p.221、p.226～227、p.227、pp.216～217、pp.496～497、

pp.155～156、pp.231～235、

「観世雅雪」、「観世銕之丞」、「観世元雅」、「喜多流」、「喜多六平太」、「白洲正子」

pp.220～221、pp.224～225、p.229、pp.247～248、p.249、pp.468～469

「大倉源次郎」、「後藤得三」、「友枝為城」、「友枝喜久夫」、「友枝昭世」「野村萬斎」【二世】

「帆足正規」

p.113、p.343、p.633、pp.632～633、p.632、p.704、p.800.

「亀井忠雄」「亀井俊雄」p.208、p.208.

「大槻文蔵」「大槻秀雄」p.126、p.125.

『翁』pp.133～134、『杜若』pp.170～171、『俊寛』p.453、『隅田川』pp.493～494、『鷹姫』pp.538～539、『薪能』pp.541～542、『定家』p.601、『天鼓』p.611、『道成寺』pp.617～618、『融』pp.624～625、『羽衣』pp.714～715、『松山天狗』p.840、『求塚』p.879、『弱法師』pp.933～934.

「替之型」p.166～167、「能楽堂」pp.682～683、「能舞台」p.688～690、

「頭」p.182、「ツヨ吟」p.596、「ヨワ吟」p.934、「橋掛リ」p.716、「白洲」p.468、

「翁猿楽」pp.135～136、「能面」pp.690～694、「小面」p.329、「般若」p.741、

「楽屋」pp.175～176、「切戸口」p.272、「松野奏風」p.835.

② 西野春雄,羽田昶編集委員『能・狂言事典』(新訂増補版第一印),平凡社,1999.

「梅若実」、「大槻文蔵」、「片山九郎右衛門」、「亀井忠雄」、「亀井俊雄」、「観世清和」、「観世寿夫」、「観世栄夫」、

「観阿弥」、「世阿弥」、「音阿弥(観世三郎元重)」、「観世流」

p.365、p.411、p.412、p.428、p.368, p428、p.413、p.374、p.413、pp.369～370、pp.387～390、p.368、pp.240～242、

「片山博通」、「河村禎二」、「観世雅雪」、「観世銕之丞」、「観世元雅」、「喜多流」、「喜多六平太」、「クローデル」、

「友枝為城」、「友枝喜久夫」、「友枝昭世」、「野村萬斎」【二世】、「帆足正規」、「宝生閑」、「宝生欣哉」

p.368、p.413、p.466、p.413、p.375、pp.242～243、p.377、p.378、pp.392～393、p.420, pp.469～470、p.420、p.435、p.431、pp.425～426、p.426.

『杜若』pp.39～40、『式三番』pp.10～12、『俊寛』p.73、『隅田川』pp.79～80、『鷹姫』pp.93～94、『薪能』pp.264～265、『定家』pp.105～106、『天鼓』pp.106～107、『道成寺』pp.107～108、『融』p.110、『羽衣』pp.118～119、

『松山天狗』p.139、『求塚』pp.148～149、『弱法師』pp.158～159.

「ツヨ吟(強吟)」p.321、「ヨワ吟(弱吟)」p.334、

「舞台」pp.339～341、「楽器」pp.341～343、「能面」pp.344～354、「松野奏風」p.399.

③ 石澤秀二著『世界演劇辞典』東京堂出版,2015.

「観世寿夫」「観世榮夫」「観世銕之丞(8世)」「岸田今日子」「クローデル・ポール」

p.85、pp.85～86、pp.84～85、p.90、pp105～106.

④ ポール・クローデル作、渡辺守章訳『繻子の靴』(上)(下)[全2冊]岩波書店,2005.

⑤ 渡辺守章著『ポール・クローデル―劇的想像力の世界』中央公論社,1975.

⑥ 西野絢子「ポール・クローデルのエッセイ「能」とその反響1930年代以降の西洋における能の受容史の中化で」慶應義塾大学藝文学会『藝文研究Vol.103, (2012.12)』p.85(178) – 99(164).

⑦ ポール・クローデル著, 内藤高訳『朝日の中の黒い鳥』講談社,1988.

⑧ 「葵上／二重の影 | 京都芸術劇場 春秋座 studio21」.

http://www.k-pac.org/performance/20140329.html　閲覧日時、2018年6月27日(水).

⑨「過去の公演/空中庭園」

http://www5d.biglobe.ne.jp/~teien/past1.html　閲覧日時、2018年6月27日(水).

⑩ 観世栄夫(編集)『日本の名随筆 (87) 能』作品社,1990.

⑪ 渡辺保(著)『能のドラマツルギー:友枝喜久夫仕舞百番日記』(角川ソフィア文庫) 角川書店 2002.

⑫ 「篠山能楽資料館｜観光施設｜丹波篠山篠山観光協会」.

https://tourism.sasayama.jp/association/2013/01/post-63.html　閲覧日時、2018年7月9日(月).

⑬ 「能楽資料館」.

http://www.nohgakushiryoukan.jp/　閲覧日時、2018年7月9日(月).

⑭ 「6県に大雨特別警報　広島など　3人死亡5人不明」「読売新聞」2018年7月7日(土), 1面.

「胸まで浸水　恐怖の夜」「読売新聞」2018年7月7日(土), 32面.

「地震被災者にじむ疲労」「読売新聞」2018年7月7日(土), 32面.

⑮ 「西日本豪雨死者127人」「読売新聞」2018年7月10日(火), 1面

「被害把握阻む土砂　西日本豪雨　救助隊現地入り遅れ」「読売新聞」2018年7月10日(火), 3面.

「豪雨死者府内4人に　家族ら悲痛　不明1人懸命の捜索」「読売新聞」2018年7月10日(火), 33面.

「72時間生きていて」広域浸水深い爪痕「読売新聞」2018年7月10日(火), 38面、39面.

⑯ 「豪雨死者130人に　72時間経過　不明57人捜索続く」「読売新聞」夕刊2018年7月10日(火), 1面.

「陸路塞がれ暮らし寸断」　「読売新聞」夕刊2018年7月10日(火), 2面.

⑰ 「豪雨復旧まず予備費拠出」企業相次ぎ救援物資　死者134人に

「日本経済新聞」2018年7月10日(火), 1面.

「発生72時間超　救出急ぐ　西日本豪雨　安否不明なお80人超」

「日本経済新聞」2018年7月10日(火), 13面.

⑱ 「死者158人不明72人」西日本豪雨避難1万人」「体育館に避難暑さとの戦い」

「朝日新聞」2018年7月11日(水), 1面.

「立ち尽くす失意の空　土砂、3世代のむ　愛媛・宇和島」,38面.

「避難所酷暑が襲う　倉敷・真備住民集中熱中症の訴えも」, 39面.

⑲ 「晴天下突然の川氾濫　広島・府中町流木や土砂、流れ遮断」

「日本経済新聞」2018年7月11日(水), 35面.

⑳ 「日仏修好160年の軌跡　ジャポニズム2018特集」

「日本経済新聞」2018年7月11日(水), 24面、25面.

 長谷川年光著「イェイツと能とモダニズム」ユー・シー・プランニング,1995.

 白洲正子著『老木の花 : 友枝喜久夫の能』求竜堂,1989.

 観世榮夫著述;北川登園構成『華より幽へ : 観世榮夫自伝』白水社,2007.

 船木拓生著『評伝観世榮夫』平凡社,2007.

 観世寿夫著『心より心に伝ふる花』(白水Uブックス;1008),白水社,1991.

 「能・演目事典：天鼓：あらすじ・みどころ」

http://www.the-noh.com/jp/plays/data/program\_021.html　閲覧日時、2018年7月12日(木)

 「天鼓」

http://www.syuneikai.net/tenko.htm　閲覧日時、2018年7月12日(木)

 「銕之丞家　(観世寿夫)」

http://www.tessen.org/about/tetsunojo/hisao　閲覧日時、2018年7月12日(木)

 「西日本豪雨　不明なお60人超　政府、激甚災害指定へ」「京都新聞」2018年7月12日(木), 1面.

 「西日本豪雨　鉄道施設被害100カ所超「東日本大震災以来」」、

「死者195人、不明65人　警視庁」「京都新聞夕刊」2018年7月12日(木), 1面.

 「支援物資一刻も早く　西日本豪雨　自治体職員、早朝から仕訳け　ボランンティアモ続々」

「京都新聞夕刊」2018年7月12日(木), 9面.

 小林保治・表きよし編／石田裕写真監修『カラー百科　見る・知る・読む　能舞台の世界』勉誠出版, 2018.

 小林保治, 森田拾史郎編『能・狂言図典』小学館, 1999 ,「能舞台」pp.33～37.

 「西日本豪雨死者7割が60歳以上　情報伝達課題　逃げ遅れか」「京都新聞」2018年7月16日(月)1面.

「災害弱者への対応課題　西日本豪雨で浮き彫り」「京都新聞」2018年7月16日(月), 3面.

 谷崎潤一郎著『細雪 : 全』中央公論社, 1988.

 服部幸雄＋富田鉄之助＋廣末保編集委員『【新版】歌舞伎事典』平凡社, 2011.

「市川猿之助」p.48、「市川団十郎」pp.49～52.

 多田富雄著『能の見える風景』藤原書店, 2007.

Ⅰ能の見える風景「能と霊魂」pp.24～29.

Ⅱ能評『定家』――個性ぶつかる気迫の舞台, pp.131～134.

 多田富雄著『脳の中の能舞台』新潮社, 2001.

 河竹登志夫著『新版歌舞伎』東京大学出版会, 2013.

 「巻頭特集　歌舞伎と能楽」「演劇男」2018年7月,pp.9～31.

 「頼政 : 能 : 喜多流 ; 弱法師 : 能 : 喜多流」(NHK DVD . 能 : 能楽名演集),

NHKエンタープライズ,2006.

 「仕舞―調 舞囃子集 : (全九曲)」(NHK DVD . 能 : 能楽名演集Ⅱ), NHKエンタープライズ, 2007.

 ドナルド・キーン著『ドナルド・キーン著作集　第六巻』「能・文楽・歌舞伎」新潮社, 2013.

 赤坂治績著『団十郎とは何者か : 歌舞伎トップブランドのひみつ』(朝日新書 ; 607) ,朝日新聞出版, 2017.

 「貧困、孤立、災害・・・社会的困難に芸術の役割は　人材育成へ京で連続講座」

「京都新聞」2018年7月19日(木), 20面.

 特別警報「うちは大丈夫」避難者少なく犠牲拡大　死者218人不明13人　豪雨2週間

「読売新聞」2018年7月20日(金), 1面.

検証「42年前の記憶　逆作用　あの時ぐらいなら・・・逃げず」「読売新聞」2018年7月20日(金)33面.

 「西日本豪雨2週間不明者捜索 長期化巨岩、猛暑で難航」「読売新聞夕刊」2018年7月20日(金)1面.

 「西日本豪雨2週間復旧 避難・・・先見えず 被災者、疲労と不安」

「京都新聞」2018年7月21日(土), 31面.

 「田辺城本丸跡、吉原の太刀振、瑠璃寺 幽斎の足跡 西舞鶴に　20年大河の露出増 期待」

「京都新聞夕刊」2018年7月21日(土), 9面.

 「平成の天皇と皇后30年の歩み 元年～10年 人々に寄せる心を詠む　皇后さまの詩魂、共感の輪」

「日本経済新聞」2018年7月21日(土), 34面.

 「人間国宝に3人　江戸小紋の小宮康正さんら　同じ分野で3代連続は初」

【能囃子方大鼓】柿原崇志　「日本経済新聞」2018年7月21日(土), 34面.

 首相、「24日に激甚指定」西日本豪雨被災地を視察「日本経済新聞」2018年7月22日(日), 5面.

 「大阪北部地震被害の八幡市　進まぬ災害弱者対応　福祉との連携必要」

「京都新聞」2018年7月23日(月), 23面.

 「西日本豪雨　ボランティア　地域間で格差」

「必要な場所で助けがない」「熱中症・二次被害も懸念」「京都新聞」2018年7月23日(月), 22面.

 「想定外」主張も住民は疑問の声　愛媛2ダム豪雨放流で浸水　自治体予測にも甘さ

「京都新聞」2018年7月23日(月), 3面.

 「生命の神秘考える　京都賞シンポノーベル賞大隅氏ら討論」「京都新聞」2018年7月23日(月), 22面.

 「京都駅ビルで能楽大連吟　12月に観世流　金剛流は能楽堂　4日に説明会」

「京都新聞」2018年7月23日(月), 8面.

; 8月4日午後2時から河村能舞台(上京区烏丸通上立売上ル)で合同オリエンテーションを開き、両流派の「高砂」などを実演し、好みを感じてもらう。参加無料。予約不要。

その後、参加を申し込むと、8月から月2回、プロの能楽師に市内でグループ稽古を受け本番に臨む。

参加費は1万円で講師は観世流が深野貴彦さん、松野浩行さん、齋藤信輔さん。

金剛流が宇高竜成さん、宇高徳成さん、山田伊純さん。

詳細や申し込みは能楽大連吟ホームページへ。

 「鬼や楊貴妃・・・神出鬼没　能楽堂五感で楽しんで　左京で28日遊園地のような多彩催し」

「京都新聞夕刊」2018年7月23日(月), 1面.

 高田和文「能をめぐる文化交流―東と西、古典と前衛」

http://www.ritsumei.ac.jp/~hidedoi/noh06\_takada.pdf　閲覧日時、2018年7月23日(月).

 「ベネチア・ビエンナーレ」「過去のアーティスト・インタビュー」「観世喜正」

http://www.performingarts.jp/J/art\_interview/1112/1.html　閲覧日時、2018年7月23日(月).

「日本の舞台芸術」「歌舞伎、能狂言、文楽の最新動向」

http://www.performingarts.jp/J/overview\_art/1005\_08/1.html　閲覧日時、2018年7月23日(月).

 「「ジャポニスム2018：響きあう魂」舞台公演ラインナップ発表」

http://www.performingarts.jp/J/topics/index.html　閲覧日時、2018年7月23日(月).

 新聞ダイジェスト社「月刊新聞ダイジェスト」2018年8月号(第52巻第8号,通算729号)

「大阪北部地震　都市機能に打撃」pp.56～61.

「骨太の方針ほか政府4計画を決定」pp.28～33.

 天野文雄編集『世阿弥を学び、世阿弥に学ぶ』(阪大リーブル ; 57)大阪大学出版会, 2016.

 淺香淳編集『オペラ辞典』音楽之友社, 1993.

「観世栄夫」139頁.

「1958年から79年は能楽界を出て俳優業のかたわらオペラ演出を行い二期会の<<修禅寺物語>>

藤原歌劇団の<<エディプス王>>、日本オペラ協会の<<春琴抄>>などを手がけた」。

「エディプス王」p.88

「修禅寺物語」p.233.

「春琴抄」p.247.

 「内濠十二景、あるいは《二重の影》 - 京都芸術劇場 春秋座 studio21」

http://www.k-pac.org/kpac/expe/vol13/top.html　閲覧日時、2018年7月24日(火)